

日本中國學會報 第七十集
二〇一八年十月六日 發行 拔刷

澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐって

宮本陽佳

澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐる

二五〇

宮本陽佳

はじめに

長篇白話小説『水滸傳』が中國のみならず日本においても廣く親しまれ、文學、言語等に大きな影響を與えてきたことは周知の通りである。近世中期頃、唐話の教科書として利用され始めるが、やがてそれ自體が研究對象となり、享保から寶曆頃にかけて各所で『水滸傳』講義が行われていたという。^①更に寶曆以降、翻案等『水滸傳』の要素を様々に取り入れた作品が生み出されていくのであるが、その前段階に多くの研究活動があつたことは注目に値する。

講義を行つていたことが知られる人物には、唐話學の先驅者の一人である岡白駒（元祿五／一六九二—明和四／一七六七）や、古義堂にあつた陶山南濤（元祿十三／一七〇〇—明和三／一七六六）等がある。特に白駒の講義については、享保十二（一七二七）年という近世期の『水滸傳』研究において大變早い時期に成立した講義録があり、しばしば注目されてきた。これとほぼ同じ内容を傳える寫本は現在各地に残つており、白駒の影響の大きさを示している。^②

そのような寫本の一つに、京都書肆風月堂の主人であつた澤田一齋

（元祿十四／一七〇一—天明二／一七八二）が筆記したものがあつた（大東急記念文庫藏）。一齋、名は重淵、字は文拱、號は一齋と奚疑齋を用い、風月堂主人の通稱である風月庄（莊）左衛門を名乗つた。若林強齋に儒學を學び、古義堂門下にあつたことでも知られる。後に白駒の下で唐話や白話小説について學び、師の著書を刊行しながら、自らも短篇白話小説集「三言二拍」に施訓するほどの唐話通となる。近世期の唐話辭書の白眉とされる『俗語解』の編者にも擬され、彼の學力と情熱は師を凌駕してたと評されている。^③

しかし、一齋が行つた『水滸傳』研究の詳細はあまり知られない。これまでには、石崎又造氏が一齋自身も講義を行つていたことを指摘し（後述）、また中村綾氏が一齋に和刻本『忠義水滸傳』（内題『李卓吾先生批點忠義水滸傳』。以下「和刻本」と略し、詳細は後述する）二集の刊行豫定があつたと見られることを報告しているが、^④どちらもその詳細は明らかにされていない。彼が『水滸傳』に關心を持つていたことは窺われるが、どのように讀んでいたのか、またいかなる刊行計畫があつたのか等、不明な點は多く残されている。

先に拙稿「和刻本『忠義水滸傳』二集について—澤田一齋の關與を

めぐって」⁵では、一齋が行った講義内容と和刻本二集の施訓を比較し、両者に類似性が認められることを指摘した。本稿では、講義内容を更に詳細に検討し、一齋の『水滸傳』研究の實態、特に師とされる白駒からの影響について明らかにすることを試みる。更に二人の講義の相違点を通じて、近世期における『水滸傳』研究の實態と變容について考察していきたい。

一、一齋の講義——「風月庄左衛門説」

一—一、講義録について

一齋が行った講義の内容は、九州大學附屬圖書館石崎文庫が所蔵する、和刻本初集⁶の書入れから窺い知ることが出来る。

和刻本初集は享保十三（一七二八）年に刊行されたもので、李卓吾による序、引首、目錄と、第一回から第十回までの本文から成る。二集（第十一回—第二十回）は寶曆九（一七五九）年に刊行され、卷末には續篇の豫告が掲載されたが、これ以降の刊行は確認出来ない⁷。またどちらにも訓點が付されているが、施訓者の名前は示されず、誰によるものかは未だ明確な結論が出ていない。

石崎文庫蔵の和刻本初集（以下「該書」と略）には、墨、朱、藍の三種の書入れがあり、表紙見返し部分に「墨 樫田阿波守説、朱 風月庄左衛門説、藍 譯解説」と示されている。筆記者や書き入れた時期に關する記述はなく、成立の詳細は不明である。舊藏者である石崎又造氏は、これについて次のように述べる（傍線は筆者が付した。以下同）。

最後に附言して置きたいことは、彼（筆者注…一齋）も亦御多分に漏れず「水滸傳」を講義してゐることである。（中略）樫田阿

澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐって

波守名は直猷、直雄の養子、知恩院宮坊官、享保十六年九月十五日生、寶曆十一年九月二十八日從六位下に敘せられ、同年十二月廿四日阿波守に任ぜられ、天明二年四月十六日歿、年五十二、澤田一齋の門人にて漢文小説「春鸞拆甲」一卷をあらはす（森銃三氏「春鸞拆甲は大雅堂著にあらず」—書物展望卷四第四號「地下家傳」）。朱筆は即ち吾が風月堂一齋であり、譯解は即ち陶晁の「水滸傳譯解」である。

本稿はこの説に従い、該書に見える一齋の『水滸傳』講義の内容を檢討していくが、先に少々補足をおきたい。

まず墨で書き込まれる「樫田阿波守説」について、『地下家傳』の樫田直猷の項には、寶曆十一（一七六二）年十二月に「安房守」に任じられたと記されている。直猷が任えた知恩院の史料にも、寶曆十二年以降「樫田安房守」の記述が散見され、筆記者の誤記が疑われる。また、森銃三氏が漢文艶情小説「春鸞拆甲」の著者として取り上げたのは「風月一齋（註。庄左衛門）弟子柏田阿波守」であり、「樫田安房守直猷」と結びつけるには少々疑問も残る。同じ人物を指している可能性は高いように思われるが、白話小説研究への關與を含め、その人物像については更に検討を要する。

藍の書込み「譯解説」は第一回のみに見られるが、石崎氏はこれを陶晁、すなわち陶山南濤の「水滸傳譯解」であると指摘している。氏によれば、「水滸傳譯解」は竹田復氏所蔵、四卷から成る百二十回本『水滸傳』の語釋であり、南濤の撰と稱せられているが署名はないという。また南濤が手掛けた『水滸傳』の辭書『忠義水滸傳解』（第一回—第十六回。寶曆七—一七五七年刊）、及びその續きと見られる寫本『忠義水滸

傳鈔譯』(第十七回―第二百十回)と比較すると、「水滸傳譯解」は抽出の語彙は多いが説明は簡略であり、甚しく説明を異にするものもあると指摘し、明らかにこれらとは別種のものであると推測している⁽¹²⁾。

しかし、筆者が該書の藍の書込みを確認したところ、『忠義水滸傳解』の内容と近似していることが認められた。例えば、第一回一丁裏の釐頭部分には、藍で「軍民 軍ハ徭役トテ軍ノ歩役ニ使フ人夫也 皆民ナレトモ分テ云トキハ民士農工商ノ四民也」とあるが、これは次に擧げる『忠義水滸傳解』の「軍民」の解説とほぼ一致する。

『忠義水滸傳解』(二才)⁽¹³⁾

軍民 軍ハ徭役トテ軍ノ歩役ニ使フ人夫也 皆民ナレトモ分テ云トキハ民ハ士農工商ノ四民也

このような例から、藍の書込みが『忠義水滸傳解』を書き寫したものであることが疑われる。

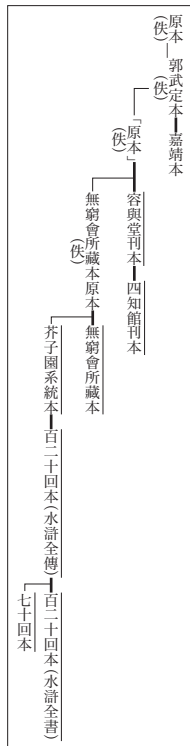
また、石崎氏は該書に見られる朱の書入れを一齋の「講義」の記録としているが、講義ではなく會讀や勉強會での發言を記録したものである可能性も考えられる。榎田阿波守の人物像と併せて検討すべきであるが、本稿では石崎氏に従ってこれを一齋の「講義」の記録と呼ぶこととする。

以下該書に見られる朱の書入れについて検討し、一齋の『水滸傳』講義及び研究の實態について考察する。まずは彼が使用した『水滸傳』版本について確認していきたい。

一―二、使用版本

周知の通り『水滸傳』には複数の版本が存在し、日本にもその多くが舶來していたと見られる。該書の朱の書入れの中には、「一作」等として和刻本初集と他の『水滸傳』版本との異同を指摘したと見られるものがあり、一齋が複数の版本を使用していたことが推測される。次に異同の指摘と『水滸傳』諸版本の本文とを照らし合わせ、一齋がどの版本を使用したのか明らかにしたい。

實例をあげる前に、『水滸傳』版本について少々説明しておく。『水滸傳』の版本は、文章の詳しい文繁本、簡略化された文簡本に大別されるが、和刻本や白駒の講義の底本は文繁本であるため、今回の調査でも文繁本のみを対象とした。文繁本は更に百回本、百二十回本、七十回本の三種に分類され、内容や文字の異同等によって詳細な繼承關係を推測することが出来る。



右の圖は版本の繼承について、小松謙氏のご教示によって作成したものである⁽¹⁴⁾。太線は異同が少ないと推定される繼承關係を示す。今回調査に使用したのは、古いものから順に百回本の容與堂刊本、四知館刊本、無窮會所藏本、芥子園系統本と、終盤に二十回が追加された百二十回本の新舊二種(以下「全傳本」「全書本」と略し⁽¹⁵⁾、「百二十回本」と呼ぶ際は両方を指す)、更に第七十一回で物語を完結させ、本文中の韻

文を削除する等の編集が加えられた七十回本の計七種である。使用したものに傍線を付す。七十回本は刊行以降『水滸傳』の主流となり、日本でも寶曆頃から廣く流布していたと推測されている。^⑬和刻本は初集、二集ともに無窮會所藏本に近い本文を持つ版本を底本としたことが指摘されている。^⑭また白駒の講義は古い系統の百二十回本である全傳本を主な底本とし、一部四知館刊本も使用しながら、百二十回分行われたと考えられる。^⑮

次に一齋が異同を指摘したと見られる箇所について、和刻本初集の本文と一齋説の朱の書入れ、各版本の本文を擧げて検討する。ただし、今回使用した芥子園系統本は第二回までが缺けているため、第三回以降について検討を行う^⑯(以下に示す丁数は和刻本初集のもの。以下引用に際し、特に示す必要のない場合、訓點、送り假名、合符は省略する。一齋説の書入れは本文中にルビのように付されるものや、匡郭外に書き込まれるものがあるが、それぞれ原本に出来るだけ忠實な形で示す。問題とする箇所と無關係な書入れは省略する。各版本の本文の讀點は和刻本に合わせて筆者が付したものであり、問題とする箇所以外の文字の異同は()内に示した)。

第四回(十一ウ)

【和刻】 東倒西歪浪浪蹠蹠上山來、似當風之鶴、擺擺搖搖回寺去、如出水之龜…

← 龜一作蛇

【容與堂】【四知館】【無窮會】

澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐって

東倒西歪浪浪蹠蹠上山來、似當風之鶴、擺擺搖搖回寺去、如出水之龜…

【芥子園】【全傳】【全書】

東倒西歪浪浪蹠蹠上山來、似當風之鶴、擺擺搖搖回寺去、如出水之蛇…

【七十回】

該當箇所なし

第五回(十四ウ)

【和刻】

酒家從前山去時、以定喫那厮們撞見、不如就此間滾將下去…

← 以定一本作一定

【容與堂】【四知館】【無窮會】【芥子園】【全傳】【全書】

酒家從前山去時、以定喫(容與堂)【四知館】無窮會…吃那厮們撞見、不如就此間滾(無窮會…滾)將下去…

【七十回】

酒家從前山去時、一定喫那厮們撞見、不如就此間亂草處滾將下去…

第四回の例は芥子園系統本或は百二十回本、第五回の例は七十回本との異同を指摘したものと見られる。また次に擧げるように、どの版本にも見られない用字について述べるものもある。

第十回(四ウ)

【和刻】

林冲又來對李小二道、今日又無事、小二道、恩人、只願如此、只是自放仔細便了…

〈一齋〉

願一作願

←

【容與堂】【四知館】【無窮會】【芥子園】【全傳】【全書】【七十回】

林冲又來對李小二道、今日又無事、小二道、恩人、只願如此、只是自放仔細便了…

表一

版本	數
容與堂	10
四知館	9
無窮會	2
芥子園	30
全傳	33
全書	33
七十回	34
(不一致)	4

表一は一齋が取り上げた和刻本初集と他本の異同全四十三箇所について、「一作」等として取り挙げられた用字がどの版本に一致するか、數値で示したものである。例に挙げたように、芥子園系統本或は百二十回本と、七十回本の本文に一致するものが多いことが見受けられる。芥子園系統本は第三回以降の検討であるが、百二十回本と概ね同じ傾向が確認された。また容與堂刊本、四知館刊本、無窮會所藏本に一致する例も見られたが、これは芥子園系統本、百二十回本、七十回本と同一の本文を持っている箇所に限られ、それ以外の箇所では一致する例は見られない。よつて右の數値が容與堂刊本等が参照されたことを積極的に示しているとは考え難い。以上のことから、一齋が使用した版本は七十回本と、芥子園系統本或は百二十回本であつたと推測される。芥子園系統本、全傳本、全

書本は異同が大變少なく、取り上げられた箇所のみからではどれを使用したのか判断出来ないが、少なくとも七十回本と併せて二種以上の版本を使用していたと考えられる。

このように一齋は複數の版本を使用していたことが窺われるが、講義の主たる底本となつたのは和刻本であつたと推測される。

第四回(十五ウ)

【和刻】〈一齋〉

智深焦燥道、俺便不及關王、他也只是箇人、待詔道、小人好ヨクメラモラテモス心、只可打條四五十斤的、也十分重了…

←

【容與堂】【四知館】【無窮會】

智深焦燥道、俺便不及關王、他也只是箇人、(容與堂)王【四知館】□待詔道、小人好心、只可打條四五十斤的、也十分重了…

【芥子園】【全傳】【全書】

智深焦燥道、俺便不及關王、他也只是箇人、待詔道、小人據常說、只可打條四五十斤的、也十分重了…

【七十回】

智深焦燥道、俺便不及關王、他也只是箇人、那待詔道、小人據嘗說、只可打條四五十斤的、也十分重了…

右の例では異同のある箇所には朱の書入れが見られるが、語の意味を示すのみで異同に關しては觸れられていない。このような例が散見されることから、講義の底本とされたのは和刻本であり、他は時折用いられる参照テキストという位置付けであつたと考えられる。

さて、以上該書に見られる講義の記録から一齋の使用版本を確認したが、一齋が白駒の講義を記録した寫本からも、彼が複数の版本を用いて『水滸傳』研究を進めていたことが窺われる。以前拙稿で指摘したが、ここでも改めて實例を示しておきたい。次に白駒の講義を一齋が記録した講義録、すなわち冒頭で觸れた大東急記念文庫藏の寫本からの引用と、『水滸傳』各版本の該當箇所を挙げる。

第四十二回

吸吸地 風ニテ殿宇ヲキシキシ動ス聲

(朱筆) 吸一本岌

←

【容與堂】【四知館】【無窮會】【芥子園】【全傳】【全書】

又捲起一陣恠(容與堂)【四知館】【無窮會】(恠)風、吹的飛砂走石、

滾將下來、搖(四知館)【無窮會】(搖)的那殿宇、吸吸地動：

【七十回】

又捲起一陣恠風、吹得飛砂走石、滾將下來、搖得那殿宇、岌岌地

動：

第四十六回

葱管 轎ニ付テアル道具也 葱トハ内空虚ナル管ユヘ葱ト云 這

管ヲヌケバハラリトスルナリ

(朱筆) 一本葱簾

←

【容與堂】【四知館】【無窮會】【芥子園】【全傳】【七十回】

當下楊雄把那婦人擡到半山、叫轎夫歇下轎子、拔去葱管、搭起轎

簾、叫那婦人出轎來：

【全書】

當下楊雄把那婦人擡到半山、叫轎夫歇下轎子、後去葱簾、搭起轎簾、叫那婦人出轎來：

右の二例に見られる朱の記述は、どちらも白駒の講義を記録した他の寫本には見られず、一齋が獨自に書いたものであると推測される。

第四十二回の例は七十回本との、第四十六回の例では全書本との異同について指摘している。一齋が自身の講義中に取り上げた異同からは芥子園系統本、全傳本、全書本のうちどの版本を使用したのか判断出来なかつたが、第四十六回の例からは全書本を使用していた可能性が窺われる。近世期の日本では百二十回本こそが完全な『水滸傳』であるとされたが、古い系統の全傳本は希少な版本であり、主に全書本が知られていたことが推測される。このような状況も鑑みれば、一齋が全書本を使用した可能性は高いと考えられる。一齋が所持していた『水滸傳』版本については今後も追及を續けることとしたいが、いづれにしても彼は複数の版本を用いる積極的な態度で、『水滸傳』研究及び講義を行っていたと推測される。

一三、解釋について——白駒からの影響

次に一齋による語句の解釋について検討する。朱の書入れは第一回から第十回まで、數の多少はあるものの全ての回に確認できる。一齋の唐話學は白駒に學んだものであると考えられているが、『水滸傳』解釋についてはどれほどの影響が見られるのか。白駒による講義の記録と比較し檢證してみたい。

先述の通り、白駒の講義は大部分を古い系統の百二十回本である全傳本に基づき、第一回から第二百十回までに見える語句を概ね現れる順に取り出して、解説を付している。本稿の末尾に掲げる表二は、第十回における一齋の講義の記録（該書の朱の書入れ）と白駒の講義の記録（大東急記念文庫蔵の一齋筆記の講義録）に共通して見られる語の解釋を比較したものである。解釋の方向性が大きく異なることは無いが、譯語が一致するものも多くないことが見受けられる。紙幅の都合上全回での比較結果を示すことは出来ないが、全體的に概ねこのような傾向が見られた。この結果から、一齋が白駒の講義の記録をそのまま自らの講義に利用したという可能性は低いことが窺われる。

更に、一齋の解釋には白駒の講義を承けているとは考え難い箇所がある。次に該箇所を含む和刻本の本文とそれに付された一齋の語釋、白駒の語釋と日本語譯を擧げる。

第三回（十四ウ）

【和刻】〈一齋〉

魯達在逃行開箇海捕文書、各處追捉、出賞錢一千貫、寫了魯達的年甲貫址、畫了他的模樣、到處張掛……

〈白駒〉

貫址 ウマレ所

（譯）魯達は逃亡中ですので、廣域手配書を出して諸方で追跡します。一千貫の賞金をつけ、魯達の年齢本籍を書き込み、人相を畫いて所方方に張り出されました……

「貫址」という語について、一齋は「ヲリトコロ」とする一方、白

駒は「ウマレ所」と解している。大きく異なるとは言えないが、「貫址」は本籍や出生地を表す語であり、白駒のように解する方が適切である。次に擧げる例も白駒の解釋が適切であると考えられる。

第七回（五ウ）

【和刻】〈一齋〉

林冲赶到跟前、把那後生肩胛只一拔過來、喝道、調戲良人妻子、當得何罪……

〈白駒〉

跟前

（譯）林冲は目の前まで駆けつけ、その青年の肩をぐっと引き寄せ、「堅氣の女房をからかえば、どういう罪になるか。」とどなりつけ……

一齋は「跟前」を「シタカイススミ」と譯し、後にも觸れるように、これを動詞として解していることがわかる。しかし「跟前」は一語で「目の前」という意味であり、文脈から見ても「到」の後に置かれているため動詞として解するのは不自然である。これは一齋の誤譯であり、白駒のいう「マンマへ」の方が適切であると言える。白駒の講義で適切な解釋が述べられ、その内容を自ら筆記しているにも関わらず、一齋はなぜ誤譯をしたのだろうか。

要因として考えられるのは、一齋が白駒の解説を誤りであると考え採用しなかった可能性、また一齋が自ら講義をした時点で白駒の講義内容を知らなかった可能性である。二人は師弟関係にあったとされ、しかも一齋が筆記した講義録が現存していることから、彼は白駒の『水

『澁傳』講義を受講していたように思われる。しかし直接受講していたことを示す根拠はない。次に、一齋が白駒の講義を受講したのかどうか、改めて考えてみたい。

二、白駒から一齋への繼承

現存する白駒の講義録の中には、講義を直接受講した人物が筆記したのではなく、筆寫によって傳わってきたと見られるものがある。²³一齋筆記の講義録には直接受講したことを示す記述はなく、これも誰かが書いた講義録を寫したものである可能性は十分考えられる。

まず一齋が初めて白駒に會つたのはいつと考えるべきなのか。すでに指摘されているように、白駒著『孔子家語補註』（寛保元／一七四二年、風月堂刊）に付されている一齋の識語には、「享保乙卯年春。初謁龍洲先生。」²⁴とあり、二人が初めて會つたのは享保乙卯年、すなわち享保二十（一七三五）年であると推測される。これに従えば、享保十二年以前に行われたと推測される白駒の『水滸傳』講義を、一齋は受講していないということになる。白駒が享保二十年以降も講義を行っていた可能性は否定出来ないが、享保十二年の記載のある講義録と一齋筆記の講義録には共通点が多く、解説がほぼ一致している箇所も見られ、同じ講義から生じていると見る方が自然であろうと考えられる。²⁵

また、一齋筆記の講義録の記述の中には白駒の名前は一度も見られないが、次のように、白駒に先行する唐話學者である岡嶋冠山の名前が書かれる箇所がある（訓點、ルビは原文通り）。

第二回

只要下尋^レ人^ヲ使^ハ家生^ト

澤田一齋の『水滸傳』講義をめぐつて

凡吾スキテ好コトヲ業トスル寸ハ家生ト云 此時家生ハ刺^レ鐔^ヲ使^シ捧也（上から朱線を引く）

（朱筆）家人女昏配所生之子謂之家生冠山解杜撰甚矣

一齋は一度書いた解説に上から朱で線を引き、別の解説を書いて「冠山解杜撰甚矣」と冠山を批判している。この記述は白駒の講義を記録した他の寫本には見られず、一齋が獨自に書き入れたものと推測される。線を引かれた解説は冠山によるものと捉えられているようだが、冠山が編纂した唐話辭書等には管見の限りこのような解釋は掲載されていない。これは白駒の講義を筆記した別の寫本に見られる解釋である。²⁶ここから、一齋は白駒の講義内容を冠山によるものと思ひ違ひをしていたことが疑われる。すなわち白駒の講義を直接受講はせず、後に他人が書いた講義録を冠山によるものとして書き寫し、目に留まつた誤りを正そうとしたと考えられる。

では白駒が講義をしていた頃、一齋はどのような状況にあつたのか。近藤啓吾氏は、享保十一（一七二六）年に一齋が若林強齋の講義の筆録者選ばれていることを取り上げ、「蓋し崎門學派に於いて師の講義を筆録するものは、豫め定められた高弟であつて、筆録者は淨書の上更に師の訂正を受けて底本としたものであり、以て重淵の望桶軒（筆者注…若林強齋の私塾）に於ける地位も想見せられる。」と述べている。²⁷一齋の入門の時期は不明であるが、この頃彼が望桶軒の中で重要な位置にあつたことが窺われ、同時期に唐話も學んでいた可能性は低いように思われる。

ただし、これは一齋の『水滸傳』研究及び講義に、白駒の影響が全くないことを意味するものではない。一齋の解説の中には、白駒の影

響を受けていると思われる例も見られる。

第二回(十ウ)

【和刻】

貪行了些路程錯過了客店、來到這里、前不巴村、後不巴店、欲投資莊借宿一宵、明日早行：

〈一齋〉

トリツク 與把同

〈白駒〉

不巴村 巴把同

(譯) ちと道のりを急ぎすぎて宿場をやり過ごし、ここまで来たところ、行く手に村なく、もどるに旅籠なく、お屋敷で一夜の宿を借り、明日は早立ちといたしたい所存…

二人はともに「不巴」の「巴」は「把」と通用するとしている。確かに發音は近いが、「巴」は強く願うこと、特に視覚的に期待することを表し、手偏がつくと「つかむ」という意味になるため、常に通用するとは言えない。右の例も、「行く先に村は見えず、戻ろうにも宿が見えない」ので泊まらせてほしいと訴えている部分であり、「把」の字で解釋するのは不自然と考えられる。

しかし白駒はこの例を含め、「巴」と「把」が通用することを積極的に述べているのである。白駒が手がけた「三言二拍」の和刻本、『小説精言』の各巻末に付されている「譯義(本文中の難語を解説したもの)」の中にも、これについての記述が見られる。次に卷一の「譯義」から例を挙げる。

○没「巴」臂 … 一作「没」巴「鼻」。巴ハ把ト通音ニテ没「把」臂トリツクニナ

ト云義

○「巴」不「得」 巴把通ス。把シ不レ得ハ。トリツカントシテトリツキ

カネタル處ヲ形容シタル辭也…

○「巴」巴「結」結 此ノ巴モ把ト通ス。…

トリツキカネ

『水滸傳』等の白話小説に見られる語について解説している『宋元語言詞典』(龍潛庵編著/上海辭書出版社/一九八五)には、「没巴臂(根據がない)」という語について「没巴鼻」「无巴鼻」「无把臂」等とも表記することが示されている。この語では「バ」という音が重視され、「巴」と「把」が通用していると考えられる。しかし、このように音を重視する特殊なもの以外には、「巴」と「把」が通用する例は掲載されず、冠山による唐話辭書や、『字彙』『正字通』といった當時使用されていた字書の中にも、この二文字が通用するという記述は管見の限り見られない。一齋は白駒の影響によって「巴」を解した可能性が高いと考えられる。

以上の検討から、一齋は白駒の『水滸傳』の講義を受講したとは考え難いものの、すでに白駒の直接の指導或は「譯義」を通してその影響を受けていたと推測される。

三、『水滸傳』研究および講義の變化

——和刻本刊行の影響

一齋の唐話學習はいつ頃始まったのだろうか。若林強齋は享保十七(二七三三)年に没し、望楠軒は強齋の娘婿である小野鶴山が継ぐこと

となるが、田中義信氏は、一齋が鶴山を補佐する形で運営されたであろうと推測している。當時鶴山は望桶軒の中では新参であり、運営には強齋の高弟であった一齋の協力が必要であった。更にそのような状態は軒主が西依成齋に交替する寛保三（一七四三）年まで続いたと推測されている。寛保三年は白駒の『小説精言』が風月堂から刊行された年でもある。一齋の唐話学習も、この前後から本格化したのかもしれない。

享保以後、唐話辭書の刊行等に伴って學界のレベルは上がっていったと推測され、一齋も様々な方面から影響を受けたことが想像される。逐一何から影響を受けたかを明らかにするのは困難であるが、ここで再び一―三で挙げた「跟前」の誤譯の要因を考えてみたい。

「跟」には確かに「従う」という意味があり、『水滸傳』本文中にも「跟着」等の形で何度も用いられている。そのため「跟前」にも「従う」の意味を反映させようとして誤った可能性が考えられる。更に和刻本初集ではこの語を次のように施訓している。

林一冲赶「到跟前」把「那」後「生」肩「胛」只「一」拔「過」來、喝「道」：「調「戲」良「人」妻「子」ヲ、當「得」何「罪」……」

ここでも「跟前」は動詞として解されていることが見受けられる。一齋は和刻本初集の訓點を絶対視していたわけではないようだが、この語については和刻本を使用したことよって誤った可能性も考えられる。

一齋は講義で和刻本初集を積極的に使用し、一―二で確認したように、中國から舶來した原刻本を参照テキストに位置付けている。なぜ

原刻本を主にしなかったのだろうか。一齋が筆記した白駒の講義録は主に全傳本に基づいており、そこに書き加えられた彼の版本校勘の結果の中に和刻本は含まれていない。よって和刻本は一齋の『水滸傳』研究の主たるテキストではなく、講義、或は會讀等の場に限りて使用していた可能性が窺われる。なぜそこでは和刻本を用いる必要があったのだろうか。

例えば會讀を行う場合、前提として参加者全員が同じテキストを所持している必要があるが、講義であっても受講者が講師と同じテキストを所持していることが望ましいことは想像に難くない。一齋が講義を行った当時、複数の人間が共通して持てる『水滸傳』テキストは、日本で刊行された和刻本初集だったのではないか。

和刻本初集が刊行されるまで、『水滸傳』テキストは中國から舶來した原刻本しかなかったと推測される。刊行前に行われた白駒の講義では、講師である白駒の手元には當然『水滸傳』版本、すなわち底本である全傳本があったであろうが、先述のように全傳本は希少な版本であり、受講者側に同じものがあつたとは考え難い。一つの版本を複数の人が見ていたのであるか。或いは寫本を作つたとも考えられるが、それにも限界があるろう。現在白駒の講義の記録と見られるものは、全て單語や短いフレーズを抜き出して解釋を付す形式であり、一齋のもののように本文に直接付されるものではない。受講後、或いは受講中であつても、『水滸傳』の物語自體を理解することは難しかったと考えられる。

白駒の講義を受講した一人である「良齋」は、攝津今津の加藤良齋であると推測されるが、彼は『水滸傳』研究に名を残した人物ではない。⁽³³⁾ 受講後全傳本等の版本を簡單には閲覧出来なかつた可能性が高い

が、なぜ『水滸傳』講義を受講したのでろうか。良齋は受講の動機について講義録の跋文で次のように述べている。³⁴⁾

大學問之道多端。自上古至六朝者四部之書乃備矣。能讀之有何難乎。而唐以來。有官府語。有俗語。加之。有轉借有諱避。有家語。故難皆理會之。唐以下書。文義難通曉者。爲是故耳。吾邦學者任々置而不講。故雖老師宿儒誤文義儘爲多也。且雖粗解隔靴搔痒而已。水滸傳者元之人羅貫中所著惣用俗。語所謂演義文者也。頃隨于岡龍洲受文義。逐一附譯解。以備後來之遺忘云

(譯) 學問は端緒が多く、上古から六朝に至るまで四部の書物が備わる。これを讀むに難しいことはない。しかし唐代以來、官府の語や俗語があり、更に假借や諱諱、家語(家や流派に傳わる言葉)の意か)が加わるため、これを全て理解するのは難しい。唐以降の書物の文義を明らかにするのが難しいのはこのためである。我が國の學者は往々にしてこれらを講じないため、老師宿儒であっても文義を誤ることは少なくない。また大まかな解釋は出来るものの、(細かいところがわからず)齒痒いばかりである。『水滸傳』は元の人羅貫中が著したものであり、全て俗語を用いている。言葉は所謂演義文である。この頃岡龍洲に従って文義を受け、逐一譯解を付す。これをもつて後の遺忘に備える。

ここで強調されているのは、『水滸傳』がどのようなものかということよりも、唐代以降の中國の書物を解すことが出来ない現状と、「俗語」を正しく學ぶ必要性ではないだろうか。良齋にとつて、白駒の講義を受講することはいわゆる漢文學習の延長であり、『水滸傳』

テキストがなくとも手元に残る「譯解」だけで受講の目的はある程度達成されたと推測される。

これに對し一齋の講義は、講師と受講者が共通のテキストを所持することで、受講者が「俗語」等を解するだけでなく、『水滸傳』を「讀む」ことを可能にしたと考えられる。二人の講義は底本や形式だけでなく、その意義も異にするものであったことが推測される。

おわりに

以上該書に見られる一齋の『水滸傳』講義について検討し、一齋が複数の版本を使用して講義や研究を行ったこと、また白駒の影響下にはあったものの、その『水滸傳』講義は受講していなかったと推測されることを示した。更に白駒と一齋が行った講義の相違を通じて、『水滸傳』講義の意義が「漢文學習」から「物語を讀む」ものへと變化していった可能性を指摘した。

そのような變化をもたらした得たのは、和刻本初集であると考えられる。他に『水滸傳』講義を行っていた人物として知られるのは陶山南濤であるが、その著書『忠義水滸傳解』は彼の講義を受講者が記録したものに、彼自身が手を入れ刊行したものである。この中には和刻本初集(二集は『忠義水滸傳解』刊行時點では未刊)が讀まれている様子があるように刻されている。³⁵⁾

：水滸傳二十回餘二至テ梁山泊ト云コトモ其處ノ頭ニ宋公明ト云モノモ初テ知レル也 梁山泊ニ因テ水滸傳ト名ツケタルワケモ知レル也 倭版ノ十回ナド讀テハ何ノ事ヤラ知レヌ也 百八人ノ内ヤウヤウト三人出ル也 ソレデサへ人々面白ガルニ況ヤ百二十回

讀テハ甚面白シ ソノ上水滸傳ノ力ニテ後世ノ小説ハ破竹ノ勢ニ
解ケルナリ

ここから、人々が第十回までの物語を楽しんでいたこと、南濤自身は『水滸傳』は百二十回本を讀むべきと考えていたことが讀み取れる。しかし、『忠義水滸傳解』の底本は百二十回本ではなく、和刻本初集と七十回本であることがすでに指摘されている。矛盾しているようだが、これも複数の人間が対象となる講義、更に不特定多数の讀者が想定される出版という形によるものであることが疑われる。『水滸傳』を讀むための辭書である『忠義水滸傳解』は、當然これを手にする讀者が所持する『水滸傳』テキストを考慮する必要があるが、當時廣く普及していたテキストは和刻本初集と、實曆以降流行した七十回本であったと推測される。これに合わせた結果、底本に百二十回本を採用出来なかつたのではないか。

従來、和刻本は玄人向けに施訓者の文の構造に關する解釋を示したものであると見られてきた。しかし、それは施訓者の名前を示さず刊行された事實と矛盾する上、刊行された享保十三年頃、左訓や語釋のつかない和刻本だけで讀める玄人がどれほどいたかは疑問である。本稿で行ってきた考察や、現存の和刻本初集に書入れを持つものが複数確認出来ることを併せると、これは『忠義水滸傳解』等の辭書を使用しながら獨力で讀む、或いは講義や會讀の場で用いる教材として重要なものであつたことが窺われる。施訓が最低限であるのも、このような使用が刊行の時点ですでに想定されていたからである可能性が浮上する。風月堂より刊行された和刻本「三言二拍」は左訓や語釋が付されてきたが、これと併せて和刻本『忠義水滸傳』の刊行意圖を探つて

いく必要があろう。
近世期盛んに行われた『水滸傳』研究であるが、その實態は未だ明らかになされたとは言いがたい。このような研究活動は、白話小説受容を考える上で見逃せない重要なものである。今回残した問題を含め、更に考察を深めたい。

注

- (1) 高島俊男『水滸傳と日本人』第一部第五章七十七頁(筑摩書房/二〇〇六/初出『水滸傳と日本人—江戸から昭和まで』大修館書店一九九一) 拙稿『水滸傳』講義録の繼承について(『京都府立大學學術報告人文』第六十九號/京都府立大學/二〇一七)において、現存の講義録のうち十五部について検討している。
- (2) 檜垣里美「岡白駒年譜」八百九十九頁(『小説三言』所收/ゆまに書房/一九七六)。この他、一齋については彌吉光長『未刊史料による日本出版文化』第一卷「出版の起源と京都の本屋」第四章第二節八十一—八十二頁(ゆまに書房/一九八八)を参照した。
- (3) 中村綾「日本近世白話小説受容の研究」第二部第三章百六十二頁(汲古書院/二〇一七)。
- (4) 『汲古』第七十二號(汲古書院/二〇一七)。
- (5) 所在記號:石崎文庫/923-リ-2/1-1/5、石崎文庫/923-リ-2/1-6/10
- (6) 初集は京都書肆文會堂林九兵衛刊、二集は文會堂・京都書肆文泉堂林權兵衛刊。
- (7) 石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』第四章第二節百五十七頁(弘文堂書房/一九四〇)。
- (8) 三上景文著、正宗敦夫編纂・校訂『地下家傳』五(三十二)一六三二頁(白

- 本古典全集／日本古典全集刊行會／一九三八。
- (10) 總本山知恩院史料編纂所編『知恩院史料集』日鑑篇二十九(總本山知恩院史料編纂所／二〇一四)。
- (11) 森銃三「春巒折甲は大雅堂著にあらず」(『典籍叢話』／全國書房／一九四二)。
- (12) 南瀟の『水滸傳』語釋に關する言及は注(8) 石崎氏前掲書第四章第三節百六十一—百六十三頁に見える。また長澤規矩也氏もこの「水滸傳譯解」について觸れ、「竹田氏藏本も、或は此系統(筆者注:岡白駒の講義録)の異本か、後日詳細に考ふべきも、南瀟の作といふは假託か。」と述べている(『續校勘叢談(三)』／『書誌學』第五卷第一號／日本書誌學會／一九三五)。筆者は長澤氏の説を支持するが、詳細については稿を改めて述べたい。
- (13) 『唐話辭書類集』第三集所收の影印による(八頁／汲古書院／一九六〇)。
- (14) 小松謙「『水滸傳』諸本考」(『京都府立大學學術報告 人文』第六十八號／京都府立大學／二〇一六)等。
- (15) 百二十回本の古い系統のものは毎回の標題等を「水滸全傳」としており、新しい系統のものは「水滸全書」としているため、このように區別する。
- (16) 白木直也「和刻本忠義水滸傳の研究」(『水滸傳諸本の研究その四』／一九七〇)。
- (17) 白木直也「和刻本水滸傳の研究―所謂無窮會本との關係―」(『日本中國學會報』第二十集／日本中國學會／一九六八)。白木氏は、無窮會所藏本と近いが同本ではなく、無窮會所藏本の祖本が底本であろうと述べた。今回小松氏によって示した版本繼承圖中の「無窮會所藏本原本」はその更に前段階のものであり、白木氏の言う「祖本」とは異なる。
- (18) 拙稿『水滸傳譯解』にみる岡白駒の『水滸傳』研究―その使用版本から―(『東方學』第百三十一輯／東方學會／二〇一六)。
- (19) 國立國會圖書館藏、芥子園藏版『李卓吾先生批點忠義水滸傳』。第二回、第二回が缺け、おそらく和刻本によって抄補されている。尙、その他調査に使用した版本の所藏等については、注(18) 拙稿「附記一」を参照されたい。
- (20) 拙稿『水滸傳』講義の實態とその影響について―講義録を手掛かりに―(『和漢語文研究』第十四號／京都府立大學中國文學會／二〇一六)。
- (21) 中原理恵「『水滸全書』郁郁堂本について」(『中國古典小説研究』第二十號／中國古典小説研究會／二〇一七)で現存する全書本の書誌、流傳について述べられている。
- (22) 吉川幸次郎・清水茂譯『完譯水滸傳一』(岩波文庫／一九九八)を參考に付した。
- (23) 注(2) 拙稿。
- (24) 注(3) 檜垣氏。本文中の識語の引用は岐阜市立圖書館藏本(國文學研究資料館が公開している畫像)による。
- (25) 注(20) 拙稿。
- (26) 注(20) 拙稿ですでに示した例であるが、ここでは一齋が講師を誰と考えていたか示す例として改めて挙げる。
- (27) 注(2) 拙稿。
- (28) 近藤啓吾「強齋先生門人簿竝に書置に就いて」(『藝林』第十卷第五號／藝林會／一九五九)。
- (29) 寛保三(一七四三)年、風月堂刊。引用は『小説三言』(ゆまに書房／一九七六)所收の影印による。
- (30) 共に國立公文所館内閣文庫藏本(昌平坂學問所舊藏)を参照。
- (31) 田中義信「澤田一齋と土佐」(『近世文藝』三十一號／日本近世文學會

／一九七九。

(32) 注(5) 拙稿。一齋は講義中に和刻本の施訓を改める態度も示している。

(33) 注(3) 檜垣氏、注(18) 拙稿。

(34) 『唐話辭書類集』第十三集所収の影印による(二百七十七―七十八頁)／汲古書院／一九七六)。句點は原文通り。日本語譯は筆者が付したものである。また()内は筆者が補った部分である。

(35) 『忠義水滸傳解』三十四丁裏(注(13) 前掲書二十四頁)。

(36) 注(4) 中村氏前掲書第三部第一章百六十八―七十三頁。

(37) 注(1) 高島氏前掲書第一部第四章七十五頁。

附記…引用に際し、合字、疊字は該當する假名に改めた。

本稿は平成二十九年年度科學研究費助成事業・特別研究員奨励費・課題番號一七J〇四六九七「唐話の流行から見る漢籍受容——岡白駒とその周邊」の成果の一部である。

表二

丁	一齋	白駒
二ウ	勸盤 盃ダイ	勸盤 カヨイホン
二ウ	湯桶 サケノカンスル	湯桶 滾湯ヲ入レタル桶 酒ノカンスル爲也
三オ	不慮 ガテンノユカヌ	不慮 ^{フツラナ} 不慮不尅トモ云 不字ハカヘル テニハ助字ト做シテミルフラチナルコトナリ
三オ	摸不着 思ヤウニユカヌト	摸不着 ^{アテ} スコシ氣ニ入ラネハ
四ウ	只願如此 願一作願	只願如此 只此通りニテト云コト
四ウ	放 ヲコナフ	放仔細便了 仔一ハ念ヲ入ルコト 放ハ行フノ意 ナサルルト云ガゴトシ
五オ	闌 タメル	闌 タメルコト也 掙ト同シ カセギタクハ一タメルヲ云

丁	一齋	白駒
五オ	是 是一作似	又好是天王堂 是似音ヲ借ルナリ
六ウ	泥水 カベヌリ	泥水匠 サクハン
八オ	搬開 ハコヒヒラキ	搬開破壁 搬ハハゴフ也 破壁ヲトリノケ開ク也
九ウ	批 批臂通	批 ^{カサシテ} 批臂借音
九ウ	闌着 アテカウテイフ	闌着 ヲサヘルナリ アテテヲサヘルコトナリ
十一オ	回 ヲキノル	回 ^{ワヤノレ} 此酒 回ハ買カカルノ意 ココニテハ只買デモナシモロフデモナシユヘニ云

※丁数は和刻本のもの。一齋の語釋は本文にルビのように付されるものが多
いが、白駒の語釋と對比するため右のような形で示した。また、引用語句や
解説中の訓點は省略した。